

大和座通信

YAMATOZA

日々新面目

其の二十七

安東伸元

英米を相手に開戦した太平洋戦争は、昭和二十年（1945年）八月十五日に敗戦という結果で終結した。その事を告げる天皇の玉音放送を、十歳の私は学童集団疎開先の滋賀県東浅井郡竹生村で、真夏の炎天下に直立不動の姿勢で聞いた記憶が今も鮮明に残っている。この日之境に、敗戦による国体・人心・思想の変動と混乱という大激動の戦後社会が始まる。この動乱の中にあつて、いち早くおのが存在を知らせる行動を起こしたのが能楽である。年表を見ると敗戦の年、東京大空襲によって数多くの能楽堂が焼滅する中で社団法人能楽協会を設立し、八月六日に聖戦完遂を祈願する「戦力能」を催すが、十五日の終戦詔勅を受け九月には「平和日本再建能」を開催するという変わり身の早さを見せるのである。翌二十一年には学問的研究

機関として「能学塾」を開講、「時事名曲能」「芸術祭能」の発足などと、積年の鬱屈を晴らすような公演活動を展開した結果、文化勲章や芸術院会員推挙を受ける能楽師が輩出したという記録を読むことが出来る。戦後民主主義社会に、古典芸能文化を束ねて代表するものとして能楽が明治維新に続いて再び登場するのである。先日配達されてきた「能楽タイムズ」五月号（62号）の一面に山本東次郎氏が日本芸術院賞を受賞されたことを報ずる記事があり、その記事内容にいささか不審を感じた。ゆめゆめ私は氏の受賞に疑義を感じているわけではない。芸術院が公表した受賞理由の文言の一節に、どうしても読み過ぎせない処があつたのでこうして筆を執っているわけである。記述を抜粋すると次の通りである。『氏は、昭和十二年東京大蔵流の孤壘を守る三世の嫡男として生まれ、幼少より父の峻厳なる教育指導の下に、斯道一筋の研鑽を積むが、弱冠二十七歳にして父の急逝に遇い武家式楽の古格堅持を家訓とする家の継承者としての責務を負う。以来、兄弟相助け、共に切磋琢磨伝承を全うし、今日次世代をも加える一家一門独自の主張の下に活発なる舞台活動を展開し、先代の先鞭による青少年への普及活動にも意を注ぎつつ衣鉢を継ぎ得たのも、偏に氏の献身と統率宜しきを得たところによる』（後略）』文中傍線を

引いた部分の文言に引つかつたのである。戦後の能楽界に充溢していた空気は、武家式楽の身分による心理的な抑制状態からの開放感と、民族意識も伴って新時代への独歩自立を目指す喜びの気持ちであった。社会にあつては、民主主義思想に煽られて報道機関が一斉に能楽の家元制度を批判する論説を展開し、能楽界の内外からは新時代に直面した能楽のあるべき姿勢と方向を問う談論が、驚くべき速さで刊行された雑誌などの紙面を賑やかに埋めた。そこで展開された論調は何れも前向きな魂の迸りを感じさせる熱気のあるもので、今読んでも充分納得と感銘を覚えさせられる確かなものであった。そして、その何れにも江戸の武家式楽への回帰や懐古を述べたものはない。戦後、合言葉的に提唱された思想は「世阿弥、もしくは世阿弥以前に戻ろう」という回帰願望であった。この思想の潮流は、今も繰り返し能楽師と、それを取り巻く研究者を中心に企画されている「花伝書」など古文獻の講読、「復元・復曲能」の上演試みなどに見られるように、現代でも能楽の心の底に脈々と流れているはずである。つまり一般庶民の愛好する舞台芸術でありたいという共通思想が能楽師の心に脈打っているに違いないのである。徳川幕府の統制下に組み入れられた武家式楽の時代は、明治維新革命の廃藩置県政策によって幕を

下ろし、扶持を得て勤仕していた能役者たちは主人を失い路頭に迷うことになった。国体が激変したのである。封建制度による武家支配の社会体制は崩壊したが、しかし施政者は相変わらず王政復古の近代国家建設を唱える勤皇思想の武士、及び武家出身の者たちであった。近代国家を目指す明治政府は、国政の基本を規定した「五力条の誓文」の項目に明記するように「旧来の陋習を破り、天地の公道に基づくべし」と、わが国古来の伝統的なものを社会の表舞台から外し、西欧的なものを追従奨励する方針をうち立てるが、能楽の家元制度は何故かそのまま残った。人心の掌握のために芸能文化のあり方を自由に統制する事は、施政者にとって重大要件である。明治天皇を頂点にする支配体制の新秩序を作る上で、天皇制の雛形としての家元制度を利用することが有効であると考えた人が新政府の中核にいたようである。能楽が家元制度を堅持して諸芸能のトップに位置を占め、その体制を旧藩主の華族と新興財閥の経営者たちが支えたのである。こうして明治政府が作り上げた古典芸能についての新秩序は、近代国家建設の枠組に合わせて、従来の封建的家元制度をより強力に補完するものであった。その結果、西欧の先進列強に倣って近代国家を目指す明治政府は、国を代表し尚かつ世界に通用する芸術文化のシンボ

ルを整備したわけである。しかしここでも能楽というわが国を代表する古典文化は、国民が遍くその影響と恩恵を享受し、民族的な誇りにつながる存在ではなく、政府の御用を勤める看板のような飾り物か、一部上流階級者の嗜好を満たすためのものであった。さて明治維新の激震に耐えた能楽は再び太平洋戦争と、それに続く敗戦という試練に出会う。戦後の民主主義社会は明治から続く国体を根底から変革させるものであった。華族制度の廃止・財閥の解体・農地改革などによって、又しても能楽はパトロンを失うのである。それから前述したとおり戦後復興時代が始まり、驚異的復興と発展を遂げた今日に到る。しかしこの機会にも能楽は庶民の手に戻らなかつた。天皇制の存続と連動して、家元制度の鎧を着せられたまま政府の敷設する古典文化行政に組み入れられてしまう。その行政方針の一つが褒賞制度である。褒賞の対象は、武家式楽の時代に幕府から認可を受けた諸流諸家に属する指導的身分の者である。つまり行政が、職分の資格を持つ者（玄人）と、そうでない者（素人）を選別して管理しているわけである。世界からの高い評価に答えて、国は最上の褒賞を能楽界に授与するが、その能楽の真価を教育の場で教えず、その結果どれほど多くの国民が能楽と無縁で生涯を終えるかを考えた時、私は心肝に

寒さを感じるのである。最後に本題に戻って、山本氏が古典伝統の意味に執心して舞台活動を展開されていることは、内外の多くが理解認識している処である。山本家が古格堅持を家訓にしておられることも事実である。しかし私の認識では、古格の堅持に努めているのは「古典の芸格」についてであって、決して「武家式楽の古格」ではないと思つのである。氏の著作や発言からそのような断言できるのではないかと思つ。現在、武家式楽の時代を誇らしい経歴と考える能楽師はないと思つ。また其処を出発点にしない事が、能楽の正しい理解と運用につながると思つ。権威としての国から委託を受けた機関（芸術院）が、いま殊更武家式楽という言葉を持ち出すことに規制の姿勢が読み取れて、私は不審を禁じえないのである。現状の維持ひいては既得権の保持のために、権威から出てくるさまざまな規制があらさまになつてきたように思つ。風通しの悪さや心の発揚しない鬱屈感は、全てこの規制管理体制がもたらせるものである。わが国の古典が飾り物に過ぎないことを国は重々承知、せめて重々しく鎮座させておきたいからいろいろ由緒来歴の肩書きを付箋したのであるが、能楽にはそのような小細工は一切無用、真裸で放り出しても世界の果てまで立派に通用する。さすれば能楽師こそ、わが国の古典文

化行政による最大の犠牲者であると言つことが出来るかもしれない。(六月朔日)



安東 伸元(あんどうのぶもと)
一九三五年大阪生まれ。一九六四年能楽協会入会、狂言方能楽師になる。茂山忠三郎家同門。
一九八一年より教育機関へ出講。現在、羽衣国際大学名誉教授、大阪芸術大学・大阪府立東住吉高等学校・NHK大阪文化センターの非常勤講師。二一年、重要無形文化財(能楽)保持者総合認定を受ける。「日本能楽会」会員。「大和座狂言事務所」を主宰。

狂言は大衆芸能である
繁昌亭「落語と狂言の会」後記

森五六九(もりごろう)

落語家にとって六十年の悲願であった

落語専門の小屋「天満・天神繁昌亭」も昨年九月のオープン以来早半年の歳月が流れた。果たしてどれぐらいのお客さんにお越し頂けるものか、オープン前はういぶんこれで気を揉み落語家が寄るともっぱらこの話題で持ちきりだったが今のところそれは杞憂に終わっている。満員御礼の際には五十円玉入りの大入り袋というものを割り(出演料)とは別に頂くのだが私の許にもちよつと溜りつつある。ありがたいことだ。そのおかげかこのところ入門志願者が後を立たず見習いと称する若者がいつも数人楽屋にたむろしている。他の古典芸能とは違い、親も落語家というのは全体の二割にも満たず、そればかりかついこの間まで落語とは全く無縁であった者が多い。「師匠、ぼくを弟子にして下さい」「君は落語が好きなんかないか?」「いや、落語はあんまり見たことないんです。テレビでちよこつとだけ見たぐらいで」「で、わしの落語は?」「いえ、師匠の落語はまだちゃんと見たことがないんです。でも、師匠をテレビで見ましてええ人やなと思ひまして、この師匠

やったらついていけると・・・」「で、今何やってんねん」「毎日パチンコやって暮らしてます」「学校は?」「はい、高校をちゃんと中退してきました」そのあと色々やり取りがあつて結局彼は入門を許された。人生の選択をその師匠の人柄に賭けて入門した彼は誰より素直で落語に対しても真っ白な分、師匠や幕内の他の先輩からもういぶん可愛がられている。落語家の皆がそうであるように今では彼も落語が心底好きで何より師匠に対して本当に一途な男である。現在彼は見習い君たちを厳しく指導する立場にいる。私は彼の師匠と行動を共にすることが多く酒席などでよくこの話題がのぼる。「あいつ、わざわざ高校中退してからわしんとこきよつてん。もし高校生やったら卒業してからおいでと言つつもりやたらんやけどな。聞いたら、パチンコで暮らしてるちゆうねん。まあ、それやたらわしの責任も軽いし、素直そうやし、第一断る理由もないやろ思つてな。」「責任も軽い」といふのはもちろん冗談だが半分本音である。師匠というのは入門志願のその若者の人生設計をとてても気にするものだ。師匠といふもの安東も然り。私も折に触れ、安東からよく耳にしている。「わしんとこへ来んなら、落語家にさえならんなら楽な人生歩めたのに」後で悩むのはむしろ師匠の方だ。だから一流と言われる大学を卒業

した者が来た場合「何もわざわざ落語家にならんでも」と必ず言つ。とにかく落語家になりたいという意志と一途な気持ちさえあれば誰だつて落語家にはなれる。封建社会とはいえ結構自由。あとは本人の努力精進次第才覚次第でどんどん上へ上がれる。国民共有の文化財産はやはりこうでなくてはならない。

ところで狂言は落語同様、古典芸能というジャンルに属する。ただ狂言の場合、大衆芸能と古典芸能の双方の顔で御機嫌を伺う落語とは趣きを異にしている。だがしかし、狂言も発祥した室町時代には大衆芸能だった。それは笑われる対象から見ても明らかである。狂言の多くが愚かな大名や主人をコケにして威張りくさる山伏を笑う。立場の弱い者が立場の強い者を笑うことを風刺と呼ぶが、当時の市民はこの風刺の毒によつてずいぶん溜飲を下げたに違いない。大衆芸能と呼ぶか否かというのはその芸の親しみやすさや分かりやすさのみによつて決められるものではなく、どの立場によつて演じられるかがその第一義だと思つ。そういう点から眺めるなら狂言は大衆芸能であると言つていいのではないだろうか。また、落語と狂言もその登場人物は主にその時代どこにでもいたフツツの人々。能と狂言の関係は講談と落語のそれに似ている。能や講談は歴史上の實在の人物が主人公な

のに対し、狂言も落語も名もなき巷の人々が活躍する。能や講談であれば、源義経、平敦盛といった著名人のオンパレードと相成るが、狂言では太郎冠者、次郎冠者、主人、大名といった具合に固有名詞の紹介は特にない。落語では脳天気なおつちよこちよいは喜六、その兄貴分は清八、町内の隠居は甚平衛さんと大体名前の相場が決まっているように狂言に登場する召し使いはみな太郎冠者とか次郎冠者というように称される。つまり当時のフツツの庶民の日常をモチーフにしたものが狂言であつた。狂言は当時の庶民の笑いとしてその立場を得ていた。確かに狂言は一時武家の式楽として能と共に一部の上流階級に庇護されることはあつたが、狂言のその精神は失うことなく今日に至つている。武家式楽だつたという過去は狂言のそういう性質からいつてもむしろ忌むしい過去として葬り去りたい事実だろう。フツツの庶民の感性は室町である。うが平成であるうが共鳴しあうものがある。先日は「天満・天神繁昌亭」にて「落語と狂言の会」を催させて頂き、おかげでこちらにも満員御礼と相成つた。狂言をするには舞台も少し狭く必ずしも最高の条件ではなかつたが、客席からおおいに盛り上げて頂き何とか無事を得たと感謝している。お客様方の声を伺つと初めて狂言に触れた方が結構多かつたようで「目からうろこ」

「食わず嫌い」と言つた言葉を多く頂き、私としてはしてやったりの思いでいる。ここから狂言ファンが増えてくれればいいしその逆も又然りである。ひと昔前には「落語の後に狂言が演れるか!」と言つた狂言師が実際にいたらしいが、先に申し上げた通り狂言はまぎれもなく落語同様庶民のものである。狂言は「ネアカの笑い」をその身上とし落語と狂言では笑いの質は違う部分が多々あるだろう。しかし、落語を好きなお客と狂言を好きなお客のセンスはそう懸け離れてはいはず。この日のトリは安東の指導で狂言謡「雪山」の歌唱演習で幕を下ろした。(ちなみに出演者が板付きのまま頭を垂れ緞帳を下ろすのは大和座の歴史の中でおそらく初めて)客席交えての大音声は舞台にいる我々とても大変気持ちはよい瞬間であつた。あくる日、知人の女性からお礼の電話。「次回も又声を出しよせてもらいます。癖になりそうやわ」という言葉も頂いた。狂言をまともにじっくり見るのは今回が初めてだと言つが、意識はすでに鑑賞を通り越して参加である。「この日は疲れてたので行くのを一瞬やめようか思つたけど来てよかつた。おおいに笑つたし、何より最後に大声出して疲れが全部吹っ飛んだわ」狂言小謡をお題目代りに信者獲得するのもいいか知れない。初めてその芸に接して分かるか楽しめるかが大

衆芸能か否かの条件とするならどの立場から笑う云々同様、狂言もきつと大衆芸能に当てはまると今回確信した次第。狂言は大衆芸能である。これからも室町の匂いと共にこの大衆芸能をお届けします。次回の開催は七月三十一日。鑑賞を目的でもよし、謡うのを目的でもよし。繁昌亭でお待ち申し上げます。
二〇〇七・五・十八



森五六九（もり じろく）

大阪生まれ。落語名・桂蝶六。大蔵流狂言方安東伸元に師事。現在、放送芸術学院、大阪スクールオブミュージック専門学校、大阪シナリオ学校の各非常勤講師の他、ECCアーチストカレッジの落語教室及び大阪府立桃谷高校特別非常勤講師など、「高座」ならぬ「講座」も勤める。現代社会にあつて、好ましい芸能人の在り方を模索中。

兆紀探求 「烏帽子作成記」

小田兆紀

大名の登場する狂言で大名が頭に着けている黒い筒状のものがありません。それを烏帽子といいます。五月人形や時代劇の陣中などでご覧になられた方もいらっしゃると思います。男子なら一度は着けてみたいと憧れる烏帽子ですが、大和座狂言事務所にある烏帽子は私には小さく、これまでは無理して使っていたのですが損傷させてしまう可能性もあるという事で私にぴったりな烏帽子を作る事になりました。そこで、烏帽子というものは一体どういふものなのか少し調べてみました。

「烏帽子とは平安時代から近代にかけて和装での礼服装装の際に成人男性が被った帽子の事で初期は薄い絹で仕立てたものだがのちに黒漆を塗った紙製のものになる。衣装の格式や着装者の身分によっていくつもの種類があり、厳格に使い分けた。正装の際にかぶる冠より格式が落ち、平安から室町にかけては普段着に合わせて着装した」とありました。本来男性用であります。白拍子など女性が被る場合もあるとの事です。烏帽子にも様々な種類があり、立烏帽子、侍烏帽子、揉烏帽子、引立烏帽子、懐中用

烏帽子というものがありません。立烏帽子は最も格式が高く、狩衣に合わせて着用し現在も神官などが着用しています。福娘の方が着ている金色の烏帽子もこれにあたるようです。我々が使用する烏帽子の形は懐中用烏帽子、または引立烏帽子の白鉢巻きなしに近いものだとかテゴリーする事が出来るでしょう。

さて、いつも道具を作る時に気をつけているのは、少しでも丈夫な壊れにくい物を作るといふ事です。どんなに見栄えが良くても一度使っただけで壊れてしまうようでは何にもなりません。使用者も舞台上で細心の注意を払いますが、どんなに注意していても不測の事態がおこるのが舞台です。ですから丈夫に作るに越した事はありません。それに烏帽子は皆様もご存じのように特定の部位で折り込みますのでその部分だけが擦り切れてしまい曲げた状態をキープ出来なくなってしまうのです。いかに消耗品の類とはいえ大切に使用したいのは当然ですし、今後起こるであろうそれらの損傷を考慮して対応策を先に講じておくのも製作する人間としては当然の事です。今までたくさんの烏帽子を見てきて、ここは傷みやすい部分なので自分で作る時は注意しておこう・・・この課題のクリアを念頭において製作作業にかかる事になりました。

そこで、ベース（型紙）を丈夫にすれば

後々丈夫になるだろうと思ひ和紙ではなく工業用の硬い紙を使う事にしました。先にはばらしてしまいましたが、これが浅はかな知恵だったという事に気付くのにさほど時間は掛かりませんでした。

まず、自分の頭のサイズより大き目に型紙を切ります。頭の大きさと同じに切ると紙の厚みや額に当たる部分の折り返し等で結局頭より小さくなってしまつからです。

その型紙に烏帽子表面（皆様が普段ご覧になる烏帽子の黒い部分の事です）になる飾り紙を型紙と同じ大きさに切り貼り付けます。型紙の強度を更に増す為に裏面（烏帽子の裏、つまり筒状の中身の事）にこしのある紙と布を糊で貼り付けます。布で何度折り曲げて擦り切れないようにする為です。それを二枚作成しミシンで縫います。

最終的にその縫い合わせたものをひっくり返し表側に飾り紙が表れるようにするので、ひっくり返す前に全ての作業を終えておくとな後が楽です。そのまま額縁の部分（頭に直接当たる部分）を仕上げます。さて、ここでさつそく先ほどの問題が生じました。型紙が硬すぎて、ひっくり返せなくなる事態になったのです。何度同じ部分で曲げて擦り切れないよう強度を持たせる為に布を貼り付けたり幾重にも紙を重ねたりしたのが裏目に出てしまいました。ここまでの作業時間は二時間弱ですが、ひっく

り返すだけで一時間以上かかってしまいました。おまけに多少無理にひっくり返したせいか飾り紙が破れて中の型紙が露出してしまつという事態になりました。こんな初歩的なミスと...と思うと情けないやら何やらで、随分ぐつたりしました。いつも何かを作る時にこの余計な知恵のせいで却つて時間がかかっている気がします。勘の良い人はそんな失敗をせずに作成する事が出来るのでしようけれども、残念ながら私は勘が良くないようです。一つの条件をクリアすることだけに気を取られ他が疎かになる、全体の流れとしてみればごく当たり前の事を見落としてしまつ、物作りだけでなく何事においても言える事ではないでしょうか。失敗しないとそこから学べないのは愚か者のする事だと思いつつ、次からはこんなくだらない失敗を二度としないようにこの経験を活かそうと固く決意しました。

色々試行錯誤しなんとかひっくり返して完成です。文章にするとわずか数行ですが、実際の作業は大変時間がかかります。この作業を先生は今まで一人でされていたのかと思うと、申し訳ない気持ちになつてしまいます。可能な限り出来る事、作れる物は我々でやるうと思つのですが何しろそのものに對する造詣が全く無い為、いらぬ手間が発生したりろくなものが出来なかつたりします。とはいえやらすにおくよりは失敗

も含めてやる方がまだましだと自分に言い聞かせ何とか作つてみました今回の烏帽子でしたが、作成作業でまた自分に足りないものを見つめなおす事が出来ました。



小田 兆紀（おだ ちようき）

一九七八年和歌山県新宮市生まれ。
 本名・小田政明。大阪芸術大学舞台芸術学科卒業。大学の講義で安東の薫陶を受け、卒業後、「大和座狂言事務所」に所属し研修を重ねている。二、三年のイラン海外公演に参加、この経験は演劇を目指す人間として自覚を定める開眼脱皮の貴重な経験となった。二、三年以来、橋本市の「市民狂言を楽しむ会」講師をつとめている。

「狂言エクササイズ」

金久蒼汲

この数年の間にスポーツ選手の身体つきが変化したように思います。野球選手を例に見てみると、以前のようなパワー重視の筋肉モリモリの選手が少なくなり、バランス重視の無駄の無い筋肉で見事なパフォーマンスを見せる選手が増えたように思います。大きく力強い筋肉がつけば、それだけパワーも上がりそれが発揮されれば大きな成果を上げるでしょう。ですがスピードは落ち、細やかなコントロールが効かなくなるのは当然です。それに比べて最近の優れた選手は、自分で自分を確実にコントロールできる必要最低限のバランス性に優れた筋肉をつけることで、自分の狙った通りのプレイを可能にしているのです。野球以外にもサッカーや陸上競技、それこそパワーが重要視されそうな格闘技の世界でさえ、こうしたバランス性を意識した身体作りをしている選手が多く活躍しているように見受けられます。考えてみれば、これは至極当然なことではないでしょうか。生活環境や生活習慣がいくら西欧化したとはいえ、私達は所詮日本人です。西欧人に対抗しようといくら筋肉をつけたところで、それをコントロールできるだけの下地が無ければ

無用の長物に過ぎません。それぞれの民族にはそれぞれに適した身体つきが存在するのですから、まずそれをよく理解し、そしてそれを最大限活かすことを考えるべきなのです。ところでこれはなにもスポーツの世界に限った話ではありません。自分の身体のルーツを知り、それに適した身体作りを毎日の生活に上手く取り入れることで、加齢に負けない、怪我がしにくい、バランスの取れた健康的な肉体を手に入れることができるのです。昨今こうした観点から、古武術や能、歌舞伎、日本舞踊といった日本古来の伝統芸能が見直され、日本人に適した健康法が盛んに取り沙汰されているようです。それに乗じて今回はあくまでエクササイズとしての狂言を、いくつか簡単に挙げてみたいと思います。

まず思い浮かぶのは「発声」です。狂言台詞を音吐朗々と読み上げるのも良いですが、ここではより呼吸を意識するという目的から、狂言歌謡を歌うのが解りやすいと思います。狂言の呼吸は横隔膜を意識的に下げ、肺への吸気量を意図的に増加させて行う腹式呼吸です。上半身の余分な力を抜き、腹筋と背筋をバランス良く使いながらお腹の底へたつぷりと息を吸い込みます。真直ぐ力強い声を出すには、声に寄り道をさせてはいけません。しっかりと腹筋背筋を意識できているか、姿勢は歪んでいない

か、声の通り道をしっかりと意識できているかなど、自分の身体と常に対話しながら謡を訓練することが大切です。また精神的な効果として、声を出すことは感情の解放に繋がります。姿勢を正し、胸を開き、深い呼吸を続けた後には、心の沈静化が起ります。謡のテーマやテンポを知ること、煩雑とした現代の生活では忘れられてしまった日本人本来の人生観を感じることができると思っています。

次に「立ち方」「歩き方」です。狂言の立ち方といえば、足を肩幅に開き、膝を軽く曲げ、身体全体が僅かに前傾姿勢をとっているというのが基本でしょうか。そして歩き方といえば、特徴的なのが摺り足です。立ち方、歩き方の両方に共通して言えるのは、しっかりと腰を落とし重心を意識できているかという点です。最近ではどのエクササイズでも、身体の深部の筋肉である深層筋（インナーマッスル）が取り上げられています。特に背骨と骨盤下肢を結ぶ唯一の筋肉「大腰筋」は、背骨を支え、骨盤のバランスを安定させる重要な筋肉として注目されています。狂言の立ち方、歩き方にもまさしくこの大腰筋が関係していると言えるでしょう。常に大腰筋を意識し、骨盤を安定させることに集中しながら訓練することで、自然と姿勢も正され、骨盤周辺の血流も良くなり、疲れにくい身体を作り上

げることができるとのことです。

最後に「小舞」です。小舞はこれまで訓練してきた「発声」「立ち方」「歩き方」の応用として総合的に行う狂言の舞です。エクササイズとしての狂言の訓練でも、できれば最終的に一人一曲ずつ、他の受講生の前で発表する場を設けることで、一つの目標にもなり、客観的な意見も享受できるのではないかと思います。これまでの訓練と違うのは、明らかに他人に見られるということと向き合って行うものなのかも知れませんが私達は日常のほとんどを社会の中で他人と共有しながら生活しています。謡を覚え、動じない心で立ち、他人の目を惹きつけながら迷い無く舞うことで、身体的にも精神的にも健康的な日常生活を送れるようになるのではないのでしょうか。

以上、思いつくままに例を挙げてみました。本来の大和座の理念とはかけ離れてしまいかも知れませんが、たまにはこうした視点から狂言を眺めてみるのも面白いかも知れません。以前これと似たようなことがある女性に体験してもらったことがありますので、その時の彼女の感想を付け加えて、この項を終わりたいと思います。

「身体の変化といえば、やはり小尻。私は出っ尻だったので、腰を入れ骨盤を真直ぐに保つ稽古で丹田に力が入り、腹筋背

筋がバランス良くつきました。摺り足の稽古では、足の裏の感覚が敏感になりました。精神的な効果として、重心が下がっているので動じない心になる。胸を開いて声を出すので、呼吸が深くなり、鬱に効く。下半身に力が入り、上半身の余分な力が抜け、素直に乗っている状態が最も集中でき、見ている美しいそうです。ヨガやダンスでよく言われます。狂言の姿勢もまさしく当てはまります。身体的、精神的にも素晴らしいエクササイズです。けれど一回や二回で変化はしません。最初の何日かは余分な力が入り、汗だくでぎこちなかったのですが、何日か経ち身体に馴染み始めたころ、心と身体に軸ができ、稽古を終えた後に何とも言えぬ爽快感がありました。ヨガの瞑想後のようにでした。やはりずっと続けてこそそのものなのだと思いました。」



金久蒼汲（かねひさ そうきゅう）

一九七八年広島県呉市生まれ。

本名・金久寛章。大阪芸術大学舞台芸術学科卒業。小田とは同期。同じく安東に師事して稽古に通い卒業後、「大和座狂言事務所」に所属して研修を積んでいる。演劇人としての肉体訓練の重要さを自覚して日々精進を怠らない律儀さを持っている。二 三 年、イラン公演で処女海外旅行を果たす。二 四年インドネシア公演旅行に参加。

「深いところまで考える」

原 斗轟

「今は音楽の果たす役割が小さくなった。文化ではなく消耗品になっている。」

あるシンガーソングライターのエッセイの一文です。私はこの一文の消耗品になったと言うことに注目してみました。私は電車などでの移動中はMP3プレーヤーというとても小さな音楽再生機でいつも音楽を聴いています。このMP3プレーヤーという機械はとても便利な機械で、100曲も200曲も音楽を登録することができ、パソコンの普及と共に爆発的に広がりを見せています。そのMP3プレーヤーで音楽を聴きながら電車に乗っている時のことです。何気なく外の景色を眺めている時、ふと4、5分前に聴いていた曲は何だったのか覚えていませんでした。私はそんな何気ない事にはつとしました。「今は音楽の・・・」というエッセイの一文が頭をよぎったのです。普通であれば、4、5分前に何を聞いていたかなどということとは、どうでもいい事なのかもしれません。しかし「今は音楽の・・・」という一文と何を聞いていたかという行為を重ねて考えたとき、これは何か繋がりがあってはないかと考えたからです。

詩や歌声、音楽の世界に没頭している訳でもなく、ただなんとなく聞くような状況は日常生活の中では少なくありません。レストランで流れる音楽やデパートの音楽、自宅でも音楽を聴きながら何かをすることはあるでしょう。音楽をBGMとしてかけることで得られる様々な効果を否定するものではありませんが、生活のなかで見聞きすることが出来る全てのこと、これらのBGMと同じようにただ流れているものに変化しているのではないかと思うのです。この変化はテレビやパソコンなど様々なメディアの発達に伴って変化の度合いは大きくなってきていると思います。パソコンや携帯電話の普及とそれに伴う技術の進歩で時間や場所に関わらず、気軽に欲しい情報が手に入るようになりました。また提供される情報は膨大な量に膨れ上がり、利用する私達には「便利」と感じているはずですがその「便利」であるという表層の部分だけを見ていては危険だと思つたのです。様々な情報が行き交う今の時代では自分にとって必要な情報とそうでない情報を選択しなければなりません。しかしそれは意識することで初めて自分の意思で選んだことになります。もし何気なく、なにも考えずに長い時間をかけて大量の情報を見ていたとしたらどうなるでしょうか。

例えば人気者の司会者がいて明るく、分

かりやすいテレビ番組があったとします。

その番組では主に健康について取り上げ連日放送され、世代を問わず絶大な指示を受けているとします。一回だけの番組ならば、自分にとって必要であるかどうかは、直ぐに意識するでしょう。ですが、毎日同じ時間にその番組を見るのです。必要かそうでないかは関係なく何気なく無意識に見てしまつてしまうでしょう。この無意識の状態に、「これを食べていけば病気になる」「この運動をすれば体によい」などの文言を目にしたとしたらどうでしょうか。たとえ自分自身に当てはまらないとしても、自分が考えてそう感じているかのような錯覚に陥り、「食べなければ自分の健康は保たれないのでは」と脅迫観念に駆られてしまつてもいいかもしれません。それは現実として「スーパー」がなくなつた」などのように現象を生み出し、記憶にもあたらしい「あるある大辞典問題」など、よく考えれば気づくような、どこがおかしな問題が起こるのです。

このような変化は情報だけに収まらず、学問や芸術、人間関係に於いても広がっているのではないかと思ひます。様々な分野で簡略化が推し進められ、エンターテインメント性を重んじるようになりました。楽しく分かりやすい事は言い換えれば何も考えたり感じたりせずとも良いと言つたことです。私達が見聞きする全てのこと、このような

システムが存在しているのです。そして学問も芸術も人間関係さえも簡略化され自分では気づかないうちに無意識に消耗してしまい自分の中に何も残らないような状態を作り出すのだと思います。「今は音楽の・・・」の一文は音楽だけに言える言葉ではなく私達の生活全てに言えることなのです。だからこそ、一旦立ち止まって選択しじっくりと考えることが必要なのではないかと思うのです。そうすれば、例えば大量の情報や軽薄な情報にさらされていたとしても、自分の意思で必要なものを汲み取り蓄積させることができ、人格を形成することができるのではないのでしょうか。同時に音楽や演劇、テレビなどのメディアで情報や表現を発信する人間は軽薄な部分ではなくもつと深いところを考え発信していかなくてはいけないのです。重たさや難しさが敬遠される今だからこそ、この問題に挑戦せねばならないと思います。



原斗轟(はら としこう)

一九八一年 福岡県久留米市生まれ。
 本名・原裕之。大阪芸術大学舞台芸術学科卒業。在学中に狂言と出会い多大な触発を受け、学外公演「狂言レビュー」において四回の狂言出演を果たす。
 卒業後も先輩(小田・金久)を助けて関西に留まり、「大和座狂言事務所」への参入を決意。

大和座狂言事務所関連 催しのお知らせ

七月

三日【火】午前十時 ビッコロ保育園(非公開)
 『狂言鑑賞会』

狂言「梟」とレクチャー

二十六日【木】午後二時 富松神社 入場無料

『富松薪能』

能「羽衣」

狂言「佐渡狐」

お問い合わせ：尼崎市総合文化センター

〇六六四八七〇九一〇 *雨天中止

三十一日【火】午後六時四十分開演天満・天神繁昌亭

第二回『落語と狂言の会』

落語 「皿屋敷」桂 蝶六

「蛇含草」桂 楽珍

「鰻屋」笑福亭 右膏

狂言「太刀奪」安東伸元 小田兆紀・金久蒼汲

「清水」山田師久・森五六九

入場料 前売り二 円(当日二五 円)

身障者・高・大学生 一八 円

小・中学生 一五 円

お問い合わせ

〇六六一六七・一五二五「賑わいや」

〇六六三五一四八七四「繁昌亭」

八月

〇五七・二九九九九「チケットぴあ」

四日【土】午後一時 関西大学第2学舎4号館

ビックホール

ひらめきときめきサイエンス

『うたって笑って〜狂言研究入門〜』

・公演『狂言研究入門』

・狂言実演

・小謡・面付体験など（参加無料）

問い合わせ 関西大学文学部

〇六六三六八・二二二

五日【日】詳細未定 堺能楽会館

市民文化講座100回記念

『狂言鑑賞会』

問い合わせ 堺能楽会館

〇七二一三三八・二〇〇〇

十二日【日】詳細未定 京都金剛能楽堂

ストヴィンスキー『兵士の物語』

ヴァイオリン・若林 暢 ほか

企画・主催 アサクラコンサート企画

二九日【水】午後二時

A&Hホールシリーズ公演

『古典伝統芸能と出会おうひととき』その四十八

新シリーズ『眞の古典力』

『閑吟集を謡う』

狂言『鳴子遣子』

男 A・原 斗轟

男 B・寺西将惺

茶 屋 安東伸元

『太刀奪』

主人 山田師久

太郎 金久蒼汲

道通り 小田兆紀

入場料 会員 二二 円

一般 一五 円

お問い合わせ A&Hホール

〇六六八七三・二六 七

編集後記

五月五日、今年からの新しい試みである天満・天神繁昌亭での『落語と狂言の会』の第一回目の公演を無事に終えました。前

売券は完売、当日券も早々に完売状態になり、当日券を求めに来られたお客様をお断りしなければならぬほどの大盛況ぶりでした。確かな手応えと共に、大和座の新たな挑戦の場である事を実感しました。

私が個人的に『落語と狂言の会』に寄せていたもう一つの期待は、若手の落語家さんとの交流です。同じ楽屋を使うだけでも大変な勉強になります。上の人を敬い、下の者をいたわる。見て学び、学んだことを伝えることで自分のものにしていくプロセスは、落語の世界も狂言の世界も共通しています。言葉をたくさん交わしたわけではありませんが、お互いを触発しあう良い交流が実現しそうです。大和座の若手が鍛えられる良い場が、また一つ与えられた事に感謝しています。

私は大和座の若手とは表現の手段は異なりますが、『プロ』を目指している一人として共に切磋琢磨しております。目標に向かって進んでいくとき、やればやるほど自分の前に立ちはだかる壁の大きさを目の当たりにすることになります。その度に思い浮かぶのが『好きこそ物の上手なれ』と言言葉です。何かを始める動機の中で

「好きだから・・・」という事程、強くてこわいものはないかと最近思っています。広辞苑には『好きこそ物の上手なれ』の意を『好きになればこそ飽きずに努力するから、遂にその道の上手となる』としていますが、「好きになれば・・・その道の上手となる」のではなく、「好きでなくてはその道の上手にはなれない」と言った方がむしろ正しい気がするのです。外的拘束要因が全くない「好き」という動機は、常に自分と戦わなければなりません。誰かにやらされた訳でもなく、自分が選んだもの、だから逃げ道もなく、愚痴る事も出来ない。「その道の上手となる」ためには、退路を断って前進する覚悟をしなければなりません。その覚悟がつまり「好きだから・・・」と言ふことかなと思います。これが『好きこそ物の上手なれ』の今の私の解釈です。この先またいろいろな方と出会い自分の経験が増えていくと、また新たな解釈が生まれるかも知れません。意味深い言葉は、まるで噛めば噛むほど味がでるスルメのようです。

さて、ちょっと関心あつて、過去の大和座通信を探っていましたら、大和座通信がこの六月号で発行十二年目に突入する事を知りました。自分が安東先生と出会う前から続いている通信に感動し、その編集作業を任されていることに喜びを感じており

ます。安東先生は第一号で大和座通信の発行理由の一つに次のような事をあげられていました。

『(略)また、大和座狂言事務所に関わる若い人達にも此の紙面が知的な作業鍛錬の場になればと思つていきます。お読み下さる皆さまの眼が、彼らを鍛えます。(略)』

大和座通信は、第一号で先生がおつしやつた通り、見事に私たち若者が自分の考えをまとめる知的作業の場となつております。毎回七部を印刷し、それでは足りない月も多々あります。これだけ多くの方の目に触れていることを意識しつつ、毎回緊張の中、通信の原稿を書いております。演技は本番の舞台で観客の目に触れることによつて磨かれていきます。それと同じで、多くの方に読まれることによつて、考えが深くなり、自分の考えを文章化する能力が磨かれていきます。こうして磨かれ蓄積された力が最終的に「その道の上手となる」上で、大きな力を発揮すると思ひます。

はやいもので、閑吟集をテーマにした今年のA&Hシリーズ公演も今日の公演で半分が終わりました。歌唱演習を盛り込んだ大和座の公演スタイルはすっかり定着し、A&Hホールにおいては「雪山」を通して謡えるほどになっています。歌唱演習は天満・天神繁昌亭においても大好評でした。謡が喜ばれるということは、やはり謡のり

ズムが日本人にとつて心地よく波長が合うという事だと思ひます。心の底に眠っている日本人心を呼び覚ませる力を謡が持つているのだと確信しました。これからも大和座は謡を大事にしていきます。

山田先生は激務に見舞われ今回の原稿は休ませていただきました。どうぞご理解ください。

秀

発行日 二〇〇七年 六月 二十日
編者 許 秀美
発行者 安東 伸元

大和座狂言事務所

代表 安東伸元

〒五五五〇八四一

吹田市千里山東二丁目三之三

TEL 06(6384)5016

FAX 06(6384)0870

http://homepage3.nifty.com/yamatoza
e-mail: BYX04535@nifty.ne.jp